

前回書いた「舞姫」に書かれた「我学問は荒ぶ…」の部分については、「読みたい古典・舞姫」という記事(10/2、9)ではまったく触れられていませんでした。

鴎外がドイツ留学を命ぜられたのは1886(明治17)年22歳の時で、この明治10年代には、雨後の筍のごとく沢山の新聞が誕生しました。全国紙の朝日・毎日・読売・日経や信濃毎日はこの頃に日刊で創刊されました。鴎外は、新しい文化として花開きつつある新聞をよく読んでいたのでしょう。「新聞」「留学」「踊り子」を落語の三題噺のようにして、明治23年に処女小説「舞姫」が完成したのではないかと私は推測します。

新聞に限らず、文学作品を国語以外の教科で生かすことも、教材研究の一つとしてお勧めします。そうして小説や随筆等を読むなかで、思いがけず「新聞を読む」「新聞を利用すること」に関する記述に遭遇すると嬉しくなります。

外山滋比古さんの「思考の整理学」(ちくま文庫)に「スクラップ」という1章がありますし、加藤周一さんの「読書術」(岩波・同時代ライブラリー)には「新聞・雑誌を読む『看破術』」という章があります。ぜひ読んでください。書名は忘れましたが井上ひさしさんのある単行本にもユニークな新聞に関する随筆が載せられています。

(鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問)